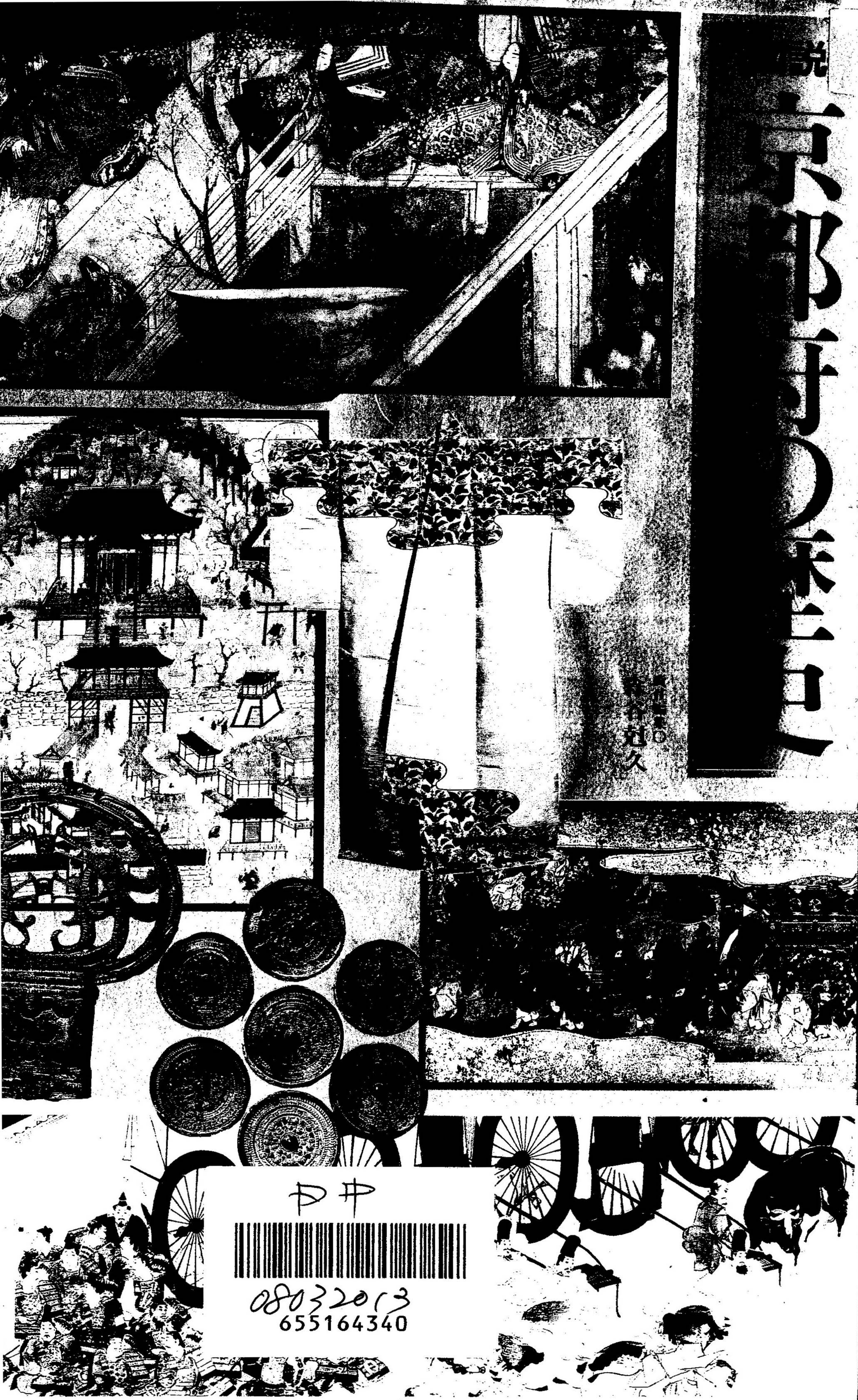
図説

京都の歴史

平安京

森谷尅久

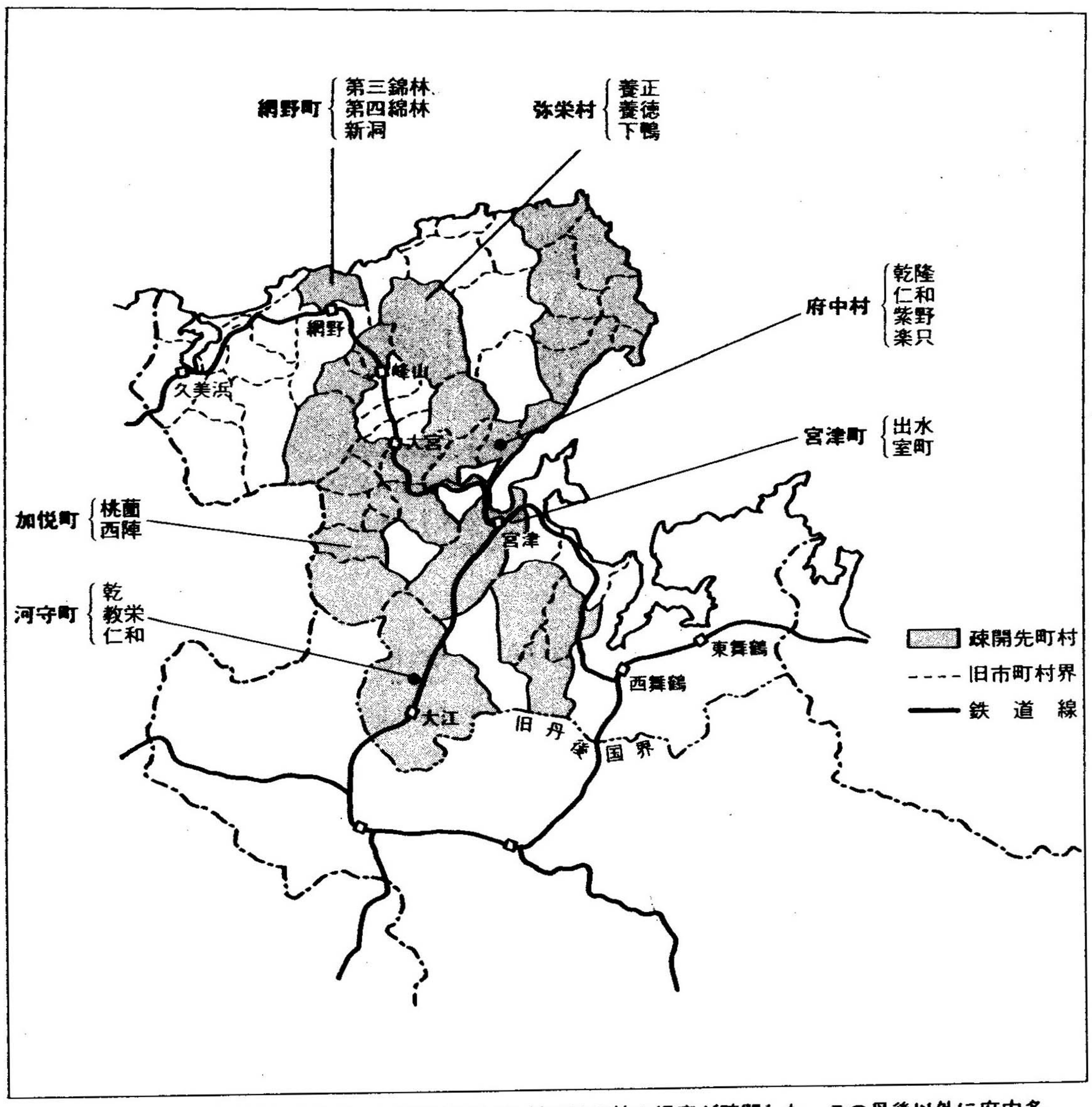


P中
08032013
655164340
L215.2

河出書房

た。こうして「赤トンボ」という名で親しまれた飛行機による訓練が始まった。戦火が激しくなると、赤トンボを被害から避けるために、国民学校の児童を動員して、八幡・宇治田原・山崎の山麓に避難させた。

また府下では福知山や峰山町に飛行隊が組織され、本土への空襲が激しくなる中で、防空体制が整備されていった。他方、人びとの寄付金による戦闘機の献納も行われ、相楽郡民のものや綾部町の愛国第三二二三綾部号と



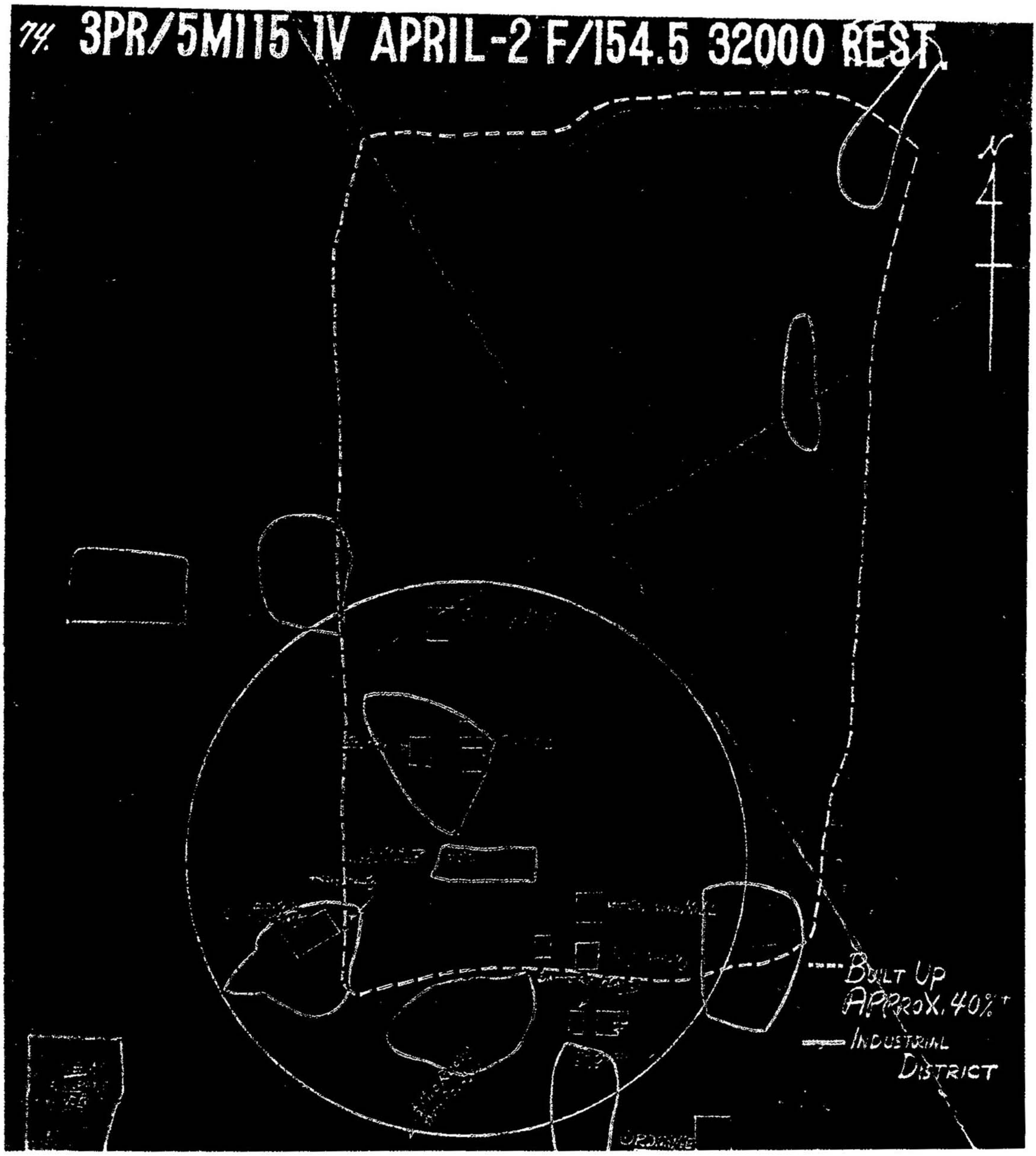
京都市内小学校の学童疎開先の町村　丹後地域3町2村には17校の児童が疎開した。この丹後以外に府内各地に児童たちは分散して疎開していった。児童は疎開先の国民学校へ通学して授業を受け、そのかたわら野菜などを作り、少しでも食糧を確保しようと努めた。

名づけられた戦闘機が知られている。

戦争が末期になって、本土決戦が叫ばれる中、一八年（一九四三）以来順次、祇園祭の御輿洗いや宵山、山鉾巡行が中止となっていった。二〇年（一九四五）七月一三日の『京都新聞』によれば、今年の祇園祭は「決戦型」であり、ただ神前での祭典だけとなり、そこに米英撃滅の祈願を込めて、「心のお祭に必勝を期する」ことになったと報じていた。祇園祭が復活するのは二二年（一九四七）になってからであり、戦時中に中止された時代祭と葵祭も、それぞれ二五、二八年になって復活した。

空襲が本格化して、戦争が末期となる中で、丹波・丹後そして南山城の村々は、政府から疎開都市の指定を受けた京都市や舞鶴市からの疎開学童を迎えた。学童疎開が始まったのは、京都では昭和二〇年三月二五日から、舞鶴では四月四日であった。さらに四月になって疎開を促進し、各疎開学校では集団疎開学童援護会を設置した。学童の疎開に前後して、空襲の際の延焼防止や避難場所の確保のために、家屋の強制疎開も実施され、多くの家屋が軍隊によって解体されていった。

京都原爆投下計画



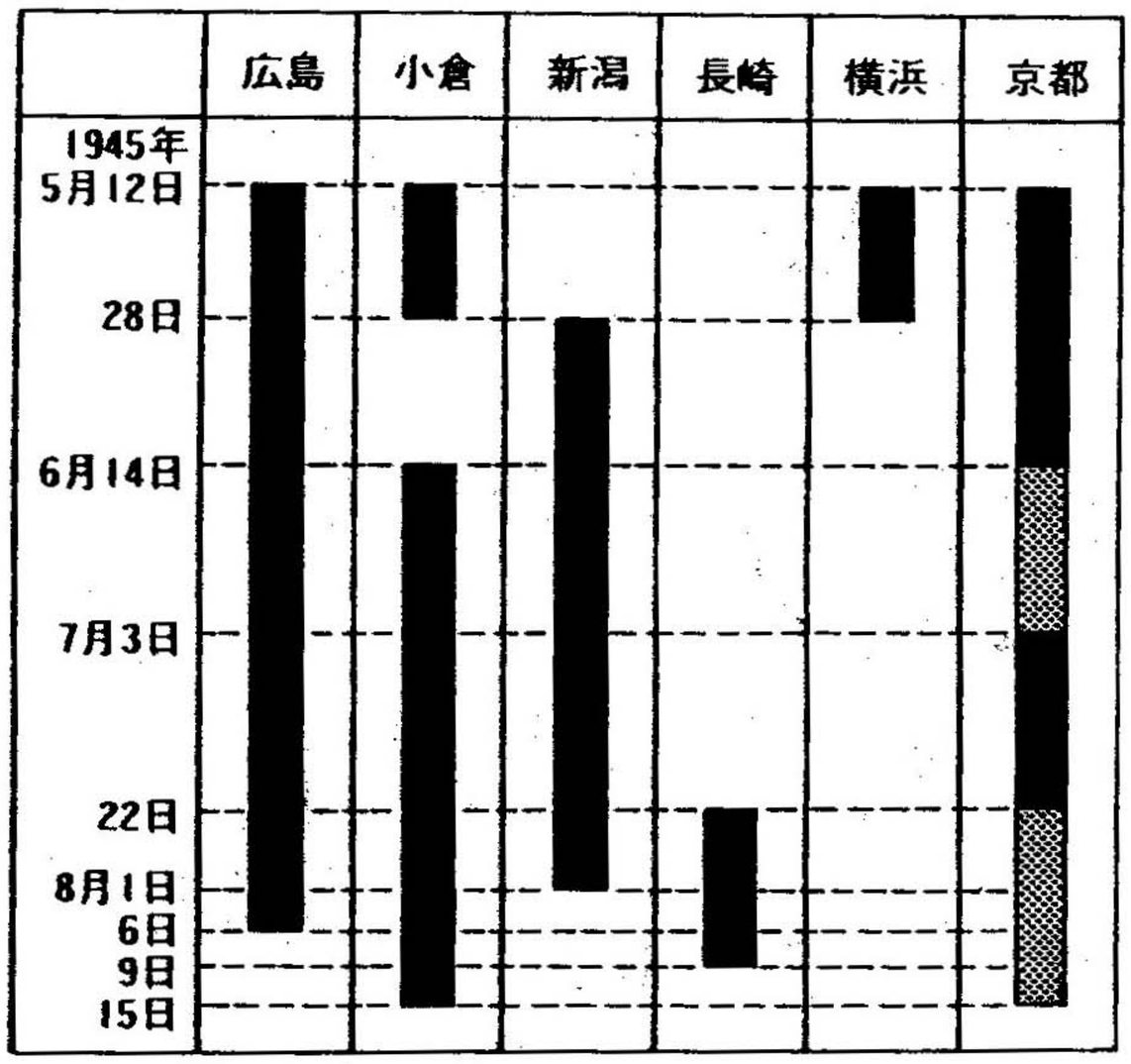
原爆投下の目標　昭和20年（1945）4月4日にB-29が撮影した航空写真に、米軍が原爆投下の目標とその影響を予想した地図を重ねてオーテス=ケーリと堀俊一が作成したもの。京都駅西側の機関車庫を爆心地としている。

京都は原爆の第一投下目標だった

「第二次大戦中、京都には空襲がなかった」と、巷間誤って伝えられるが、京都には空襲がなかったわけではない。昭和二〇年（一九四五）馬町、その他が空襲を受け、死傷者も出ている。しかし、東京・横浜や大阪などの大都市が軒並みサイパン島から発進してくるB29による空襲によって徹底的な破壊を受けたのに比べると、六大都市の一つであったにもかかわらず、京都のみがきわめて軽微な被害にとどまった。

その理由について、〝アメリカ軍が日本の貴重な文化財を守るために、京都や奈良・鎌倉を空襲の対象から外したからであり、それをアメリカ政府に進言したのが親日家の日本学者ランドン=ウォーナー博士であった〟という説が、終戦直後から長い間、広く信じられてきた。奈良や鎌倉などには古都の恩人として博士を顕彰する記念碑もある。

しかし近年、同志社大学名誉教授オーテス=ケーリ、樟蔭女子短期大学助教授吉田守男の研究によっ



原爆投下の目標となった都市とその期間　吉田守男「京都・奈良はなぜ空襲を免れたか」「世界」1993年5月号より。

空襲の焼跡　昭和20年（1945）6月26日西陣（出水）。京都市ではこのほか、同年1月16日馬町、3月19日右京区、4月16日太秦、4月22日北区、5月11日上京区・中京区に空襲があり、それぞれ死傷者を出している。

て、つぎのような事実が明らかになってきた。

まず、ウォーナーがそのような進言をした事実はない。のみならず、アメリカ側の資料によると、京都に大空襲がなかった本当の理由は、京都が原爆投下の最有力候補だったからなのである。

アメリカの原爆投下の目標となった諸都市と、目標であった期間は（図）のとおりである。これらの都市は、まだ空襲被害を受けていない大都市という基準で選定された。通常の爆弾で破壊された都市では、人類史上最初の原子爆弾の破壊効果を正確に測定することができないからである。市街地の大きさと盆地という地形から、京都は最有力候補地であり、京都駅西側が爆心地に予定されていた。いったん選定された都市は、原爆の投下目標である間、通常の爆撃が禁止され、温存された。

京都に大空襲がなかった理由

その京都が投下目標から外されたのは、戦後の対日占領政策を考慮したスチムソン陸軍長官の強い反対によるものであった。スチムソンは戦前に来日して夫人とともに京都に滞在したことがあり、日本人にとっての京都の特殊な位置についての認識があったという。こうして、人類最初の原爆は、まず広島と長崎で炸裂することとなった。

しかしアメリカは、さらなる原爆投下を計画しており、原爆計画の総指揮官グローヴズ少将とB29爆撃部隊の司令官アーノルド大将は、スチムソンの指示によって最初の投下地から京都を外したのちも、三発目以後の投下地として京都を温存し続け、京都を対象とした原爆投下のリハーサルも行っていた。三発目の原爆投下は、八月一七、一八日以降には可能となる予定であった。しかし八月一五日に日本政府がポツダム宣言を受諾して終戦となった。

奈良や鎌倉に空襲がなかったのも、大都市から始まって、順次中小都市へと及んだ空襲の順番が回ってくる前に終戦になったからだとも考えられる。

なお、軍港のあった舞鶴は、昭和二〇年（一九四五）七月二九、三〇日の二日間にわたって、大規模な空襲に見舞われ、動員を受けて舞鶴海軍工廠で作業中であった京都師範学校などの生徒らをはじめ、多くの死傷者を出している。

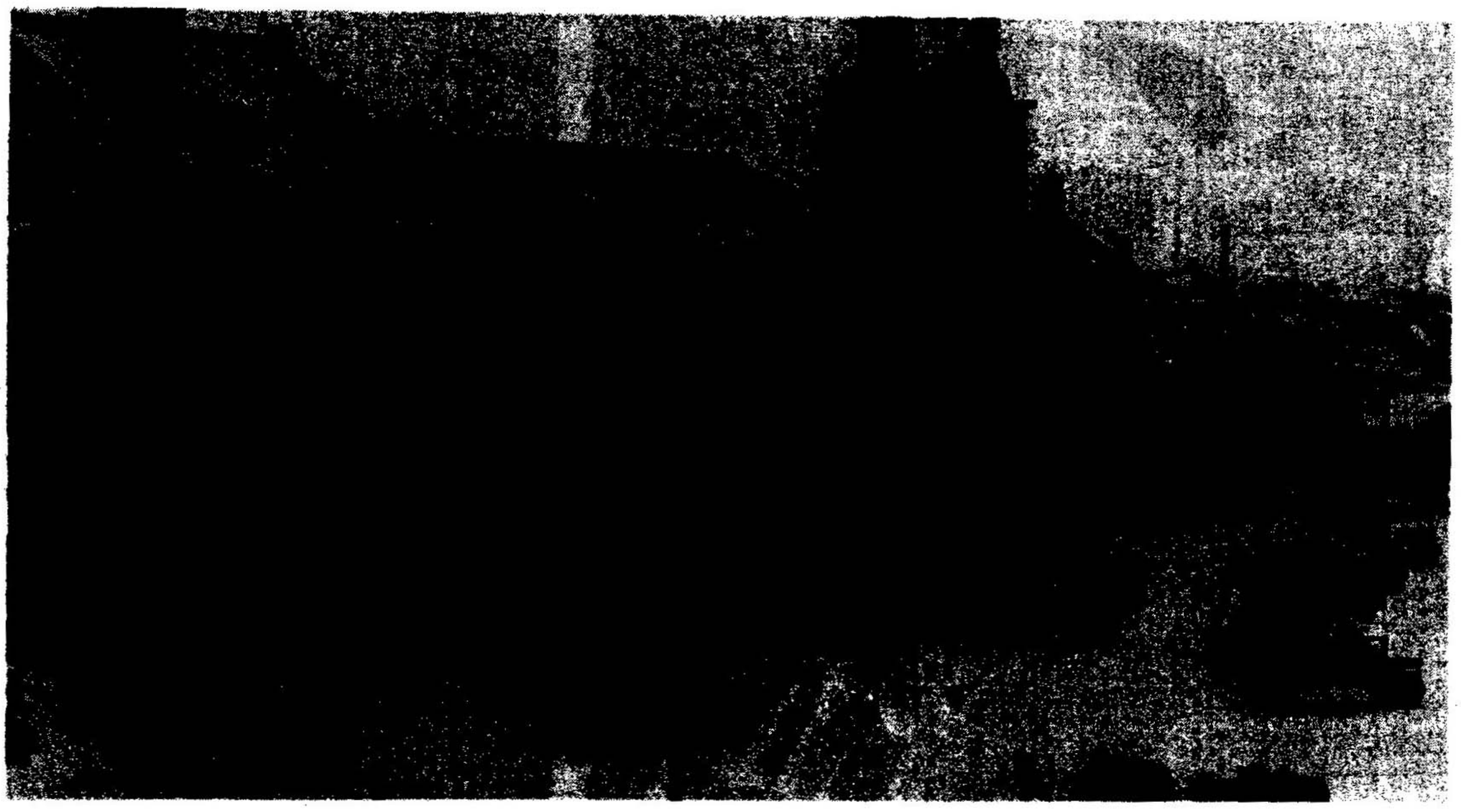
（小股憲明）

参考文献

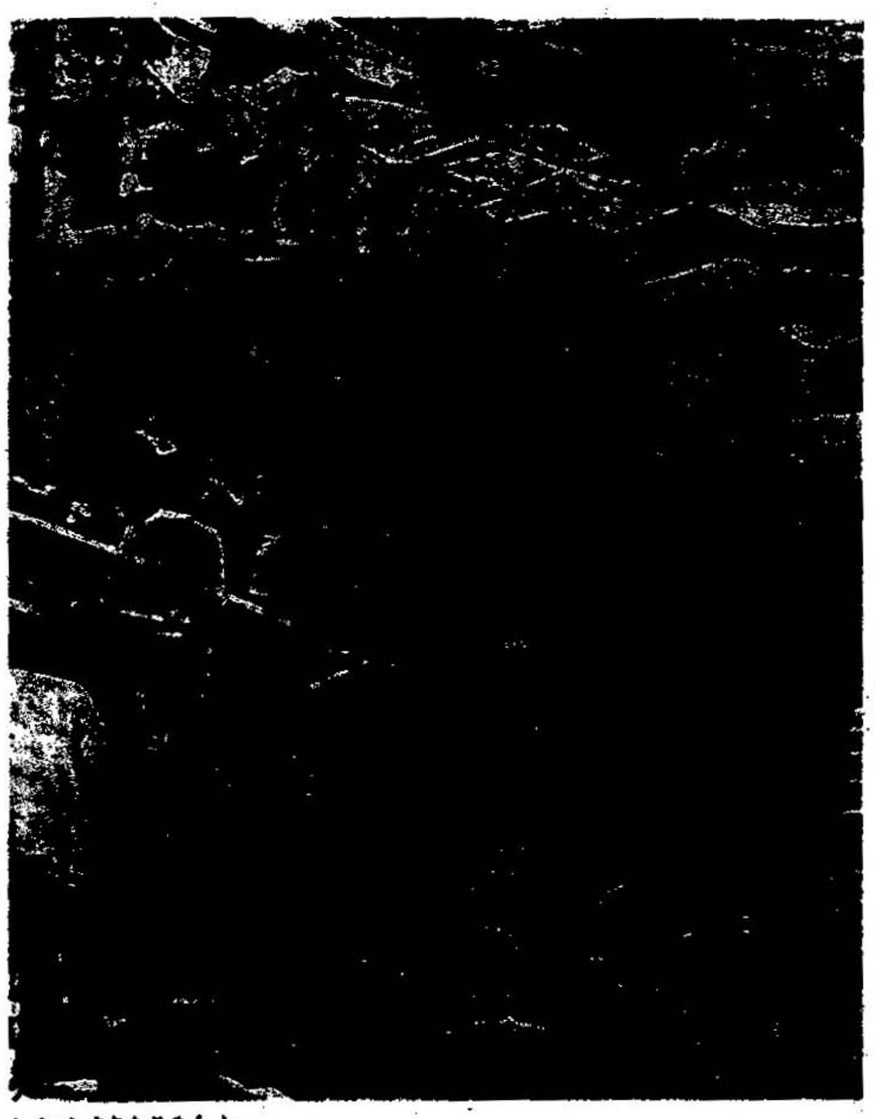
・吉田守男「京都・奈良はなぜ空襲を免れたか」（「世界」一九九三年五月号）ほか。

・オーテス＝ケーリ「秘録・原子爆弾日本投下計画」（「中央公論」一九七九年九月号）ほか。

戦後の復興と発展



進駐軍の京都占領　昭和20年（1945）9月の京都駅前。四条烏丸の大建ビルが司令部に、京都ホテル・都ホテルなどが将校宿舎に、公会堂・植物園などは兵舎・家族住宅に接収された。



河原町蛸薬師にできた闇市　京都市内の闇市は、このほか東七条、新京極、出町橋、西堀川四条、五条橋など、各所にできた。舞鶴市内でも東舞鶴・西舞鶴駅前広場など数カ所に出現した。

闇市・食糧難の時代

敗戦を告げる昭和二〇年（一九四五）八月一五日の「玉音放送」によって虚脱状態に陥った府民は、すぐに占領軍の進駐という事態に直面する。進駐を前にして京都師団や府庁・市役所などの軍関係施設や町村役場で重要書類の焼却が行われて、歴史的にも貴重な書類の多くが失われた。一般府民は、日本軍のアジア諸国における残虐行為の連想もあって、占領軍の暴行、とくに女性に対する暴行の恐怖におびえた。

アメリカ軍を主体とする連合軍の日本占領は、同年八月二八日先遣隊の厚木進駐によって始まったが、京都の占領は、九月二五日連合軍第六軍が京都駅前広場に終結したのち、久世郡大久保村（現、宇治市広野町）に駐留して始まった。鎮守府のあった舞鶴には、一〇月二七日第六軍第三三師団歩兵第一三三連隊が姫路から進駐し、中舞鶴の元海軍兵学校舞鶴分校跡を兵舎として、武器、弾薬、軍事施設の接収にあたった。

こうして京都府下全域の占領が、当初心配されたような混乱もなく完了したが、舞鶴では、一一月一三日、湾内で弾薬投棄中の艀など三隻が大爆発を起こして、三三人が即死するという大惨事が発生している。しかし、海軍関係の軍需工場がすべてつぶれて失業者が街にあふれていた舞鶴では、進駐軍関係の仕事は、いわば唯一の就職の場でもあった。

二二年秋から二三年（一九四七―四八）二月にかけて、京都府警察部は旧舞鶴海軍の物資払い下げをめぐる不正を捜査し、京都地方検察庁も二三年四、五月に隠匿物資の不正摘発を行った（旧舞鎮事件）。同じことは伏見の京都師団、宇治火薬製造所などでも起こった。

敗戦から昭和二三―二四年ころまでは食糧事情が極端に悪く、多くの人びとは飢えに苦しめられ、京都市内には各所に闇市が出現し、戦争孤児の姿もあった。戦中戦後の飢えの体験は、飽食の時代といわれる今なお、多くの